

木曾三川と桑名湊

郷土史家 西羽 晃

明治4（1871）年の岐阜県の報告書（「辛未念租税取調方心得」）によれば、「勢州桑名湊の他に津出便利之湊無御座候」とあるように、木曾三川の上流である岐阜県と河口である桑名湊は川運によって密接に結ばれていた。その状況は江戸時代も同じである。川運は米や木材が大きな比重を占めていたが、その他の諸物資も美濃地方から桑名へ、桑名から美濃地方へ流通した。

桑名へ来た物資は、焼物（美濃焼）、石灰（赤坂）、和傘（加納）など特産品や、薪、炭、竹、蔦藤、小豆、酒、塩マツタケ、塩アユ、ソバ、織物などである。桑名から送られた物資は塩、盆、灰などであった。塩は生活必需品であるが、山国では生産されないため、重要な輸送物資であった。江戸時代に桑名で扱われた塩は伊勢湾岸の黒部（現松阪市）塩が主であったようだ。多芸郡高田町（現養老町）の塩商人は桑名の塩問屋・井上栄次郎との1回の取引が2500俵にも及んでいる。瀬戸内海方面の塩は明治初年から盛んに来たようだ。

江戸時代初期に木曾川の綱場が錦織（現八百津町）に出来て、それより上流との舟の往来は出来なくなったので、綱場のやや下流にある黒瀬（現八百津町）湊が木曾川の舟の遡航最終点となった。今でも文政5（1822）年建立の常夜燈が残っている。ここは苗木藩領や木曾谷との陸路中継地であって、色々な物資の集散地であった。江戸時代中期の美濃地方の地域誌である『濃州徇行記』では「商家多して繁昌なる湊也、・・近村の商荷物は勿論の事苗木領より日々背負出る荷物や牛馬荷物を船積にして木曾川を下し処々へ運送するに便利なる処なり、されば兼山あたりよりも湊町並にぎはしく見えたり」とある。



黒瀬湊跡の常夜燈

錦織湊のやや下流に兼山（可児市）湊があるが、錦織が栄えるに反して寂れていった。しかし、今でも常夜燈と船着場の石畳が残っていて、県指定史跡となっている。

木曾川の支流である飛騨川では下麻生（川辺町）に綱場があり、下麻生湊が遡航終点として荷物の中継地であった。

木曾川中流の笠松は美濃・尾張の幕府領を管轄する笠松陣屋が置かれた処で、交通の要所でもあり、多くの物資が集積され、中継された。木曾川筋最大の湊であった。今も常夜燈など船着場の石畳が残り、県指定史跡となっている。

長良川筋では上有知（美濃市）湊には、今も大きな灯台が残り、県史跡となっている。

揖斐川筋では支流の水門川に大垣湊があり、大きな灯台も残り、県指定史跡になっている。同じく支流の杭瀬川に赤坂（大垣市）湊があり、ここも常夜燈があり、大垣市指定史跡である。